

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援 スケッチブック 荒江		
○保護者評価実施期間	R7年 1月 14日		～ R7年 1月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数) 16
○従業者評価実施期間	R7年 1月 14日		～ R7年 1月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	9	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	R7年 3月 3日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	職員の数が充実しているため、安全面に最大限に配慮しながら支援を行うことができる。	利用者の安全を第一に考え、送迎時の人数や支援中の人数も余裕をもって配置している。	引き続き、利用者の安全を第一に考えた体制で支援を行っていく。
2	職員が基本的な手話を使えるため、利用者が自分の気持ちをうまく伝えられない時でも、手話や指文字、音声でのモデリングを行うことができる。また、絵カードの活用ができる環境も整っており、適切なサポートができる体制が整っている。	毎日手話研修を行い、職員の手話技術の向上を図っている。	引き続き毎日の手話研修を行うとともに、研修内容の充実も図り更なる手話技術向上に務める。
3	遊びの中で自然に他者と関わることで、実践的にコミュニケーションの幅を広げることができる。	机上の学習は最小限にし、楽しみながら学べる環境を整えて利用児が無理なくコミュニケーション力を身につけられるよう配慮している	引き続き、他者との関わりを持てる環境を整えるとともに、支援中の様子をしっかりと保護者にお伝えしていく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	様々な職種や経歴の職員がいるため、様々な観点から支援を行える半面、職員間の認識や価値観にズレがあることがある。	ケース会議の内容を、その後定期的に見直すことができていることが多い。指導員が誰でも確認できる場所に明記しているが、その場所に工夫が必要。	ケース会議の内容を『職員全員が意識して目を通す場所』に記載し、いつも意識を向けられるように工夫する
2	玄関の鍵やドアを利用児があげられるようになっているため、利用児が外に出しまうリスクがある	虐待防止の観点から、利用児が届かない場所への鍵の設置をしてこなかった。	リスクを回避するため、保護者の不安を解消するためにゲートの設置をしていく。
3	外遊びをする機会がない	特に発達障がいのある利用者は予測しにくい行動をとることがあり、安全管理の面から、積極的に外遊びを行おうとするにいたらなかった。	近くの公園を調査し、出入り口やその他危険な個所の確認をし、対応方法について話し合った上で、朝から利用の時などにその日の利用状況も考慮し外遊びを取り入れていく。